



1 葬儀に求めるものは人それぞれで、マニュアルはあってないようなもの。オンリーワンの大切なセレモニーを滞りなく進めていくためには、スタッフのチームワークが欠かせない 2 葬祭ディレクターの仕事は、多くがご遺体の搬送からスタートする。「丁寧かつ安全な搬送を心がけています」と足立さん 3 「生まれてきた限り、誰もがいろんな人と関わって生きています。別れの場を設定することが、ゆかりのある人の心の区切りになるのです」と話す宮永社長 4 棺をたくさんの生花で包んだ生花祭壇 5 家族葬専用「皆生ホール」の会食エリア 6 多様化する葬儀形態に対して、遺族の希望を丁寧に聞き取りながら、一人一人に合った葬儀の形を提案する 7 家族葬専用「松江葬祭会館」の親族控室 8 家族葬専用「東朝日町ホール」の式場。山陰各地で14の葬祭会館を展開。近年家族葬の需要が高く、家族葬専用のホールにも力を入れている



## きめ細やかなホスピタリティで 人生の最期のお手伝いを

多様化が進む葬儀業界において、山陰で14会館を展開する《株式会社葬仙》。東証プライム上場企業である《燦ホールディングス》の一員として、遺族に寄り添う葬送の在り方を追求している。

サービスの品質向上に注力し  
さまざまな葬儀ニーズに対応

コロナ禍で大きく形を変えたものの一つに葬儀がある。一時は、感傷拡大への懸念から葬儀の取り止めや、人を呼ばない直葬の需要が増加。そんな中で葬儀社が遺族に提案したのが、開式前に焼香だけで故人を追悼するという形だった。《株式会社葬仙》の宮永誠治社長(65)は、「たったの数秒でも、故人とお別れで

きたことが遺された人にとっては力になり、ご遺族にとっても故人の知らない姿を知ることができます。人を送る場所を設けることは、亡くなった人の冥福を祈るだけでなく、遺された人にとっても大切なことなのです」と強調する。

地方では、自宅や寺社、集会所などで葬儀を行うのが当たり前だった1980年、米子に葬儀専用会館を開設。当初は戸惑いの声もあったが、利便性の高さや負担軽減が評価されて徐々に需要を伸ばし、現在は山陰で14会館を有している。葬儀の考え方は人それぞれ異なり、求めるものもさまざま。ニーズの多様化に応える体制を整備し、サービスの質向上に努めてきた。2005年には専門葬儀社最大手「公益社」を中核とするグループ、《燦ホールディングス株式会社》の一員となり、更なる品質向上に磨きをかけていった。

葬仙が大切にしていることの一つが、遺された人が故人の死に向き合え、きちんとお別れができるということ。宮永社長は、「たとえば納棺。我々スタッフだけでも行えますが、できるだけご家族やご友人の方に関わっていただきます。送る。という経験を実感していただくことが大事だと考えています」と語る。

数年前からは葬儀後のアフター



## 株式会社 葬仙

創業 昭和55 (1980) 年5月  
代表者 代表取締役社長 宮永 誠治  
社員数 90名 (男33名 女57名)  
本社 鳥取県米子市長砂町1075

### 事業内容

葬祭事業、仏壇仏具、墓石等の販売・斡旋など

### 勤務地(採用エリア)

米子市、松江市、鳥取市、境港市

### 採用区分

新卒採用 **キャリア採用**

インターンシップ・キャリア

無 ※要相談

### 採用担当者からあなたへ

葬仙では、「人物重視」の選考を行っています。特別なスキルは必要ありません。「人の役に立ちたい、社会に貢献したい」等の想いがある方は、葬仙の仕事に興味を持っていただいた方は、ぜひ一度お問い合わせください。皆様のご応募、お待ちしております！

総務人事部 マネジャー  
前田 靖さん



### 採用に関するお問い合わせ先

0859-34-7511

公式サイトはこちら



グループサイトはこちら



求人サイトはこちら



1 新人スタッフは、先輩スタッフと一緒に葬儀を担当し、遺族への接し方や段取りなどを実践的に学ぶ。引き継がれる経験と、スタッフそれぞれの想いや工夫が良い葬儀へとつながっている 2 社内外では定期的に研修を実施し、知識や技術の研鑽を積んでいる 3 地域住民の方との交流を目的に、葬仙が主催した「第10回葬仙いきいき杯親善グラウンドゴルフ大会」には県内外から約400人が参加し、親睦を深めた



1 2 3 サービスフロントスタッフの業務は、式場のセッティングや参列者の案内、料理や花などの発注など多岐にわたる。遺族や参列者が故人への別れと感謝を納得いく形で告げられるよう、随所に気を配る 4 5 6 遺族にとって悔いのない葬儀を実現するには、打ち合わせや聞き取りを重ねることが不可欠。希望に沿うだけでなく、言葉の裏にある想いも感じ取って求められているサービスを提案するのが葬祭ディレクターだ

## 人の想いをつなぎ、心で支える

フォローも積極的に実施。四十九日の準備から各種名義変更、相続の手続き、遺品整理など、遺族はさまざまな手続きを行う必要があり、期限が定められているものも少なくない。そこで自宅まで出向いて必要な手続きを説明し、要望に応じて専門家を紹介するなどきめ細やかなサービスを進めている。

### 遺族に寄り添い、納得できる葬儀を提案

葬儀社の仕事は、いわゆる「セレモニー」を行うことだけではない。故人を悼み、遺族に寄り添い、両者の最期の想いをつなげるお手伝いをする——そんな究極のホスピタリティが求められる。入社11年目の葬祭ディレクター、石橋隼人さん(30)が印象に残っているエピソードを教えてください。日本を旅行中の台湾の方が急逝し、松江市内の病院からSOSが来た。コミュニケーションに苦労しつつも、母国に遺体を運んで葬儀を行いたいという家族の想いが判明。「子どもさんたちは費用を理由に反対されましたが、奥様の想いは強くて。何とかしてあげたくて走り回りました。調べた結果、海外旅行傷害保険で遺体搬送費用を賄えることが分かった。公的機関との連絡など各種手続きを行い、

遺族の負担を最小限に抑える形で希望に沿うことが叶った。葬儀の相談は、費用の話を中心に進められることも少なくない。しかし石橋さんが最も重視するのは、故人と遺族の想いだ。「費用も大事です。しかし一番大切なのは、最期の瞬間に両者が何を求めているのか」ということ。その想いを聞き取り、ベストな形を実現していくのが私たちの仕事なんです」

葬祭ディレクターは、葬儀の運営を全般的に担うコンサルタントとも言われ、多くは遺体の搬送時に業務がスタートする。3年目の足立銀河さん(24)は、「大切なご家族を亡くされた遺族の方々には通常の精神状態ではありません。その気持ちに寄り添いつつ、火葬場や寺などの連絡をスピーディーに行うことが求められます」と話す。一言で「家族」と言っても、一人一人故人や葬儀への想いは違う。「喪主様だけでなく、想いがある方々にはできるだけお話を聞き、多くの皆さまに納得していただけるお別れの形を提案できるような心がけています」と足立さん。以前は人の目を見て話すのが苦手だったが、わずか2年でコミュニケーション力や責任感が随分養われた。人の死は前もって日時が分かるわけではなく、当番の社員は真夜中に

駆け付けることも。しかし、完全週休二日制や一分単位での残業手当支給など労働環境は整備されている。「大切なのは、お客様の想いをきちんと引き継ぐこと。それはスタッフが健やかな心身を維持してこそできるものです」と宮永社長も語る。

### 多職種のチームワークで最期をトータルサポート

大切なセレモニーを滞りなく進めていくためには、目に見えないさまざまな気配りが求められる。「求められるサービスや形は毎回異なり大変ですが、そのぶんやりがいを感じています」とサービスフロントスタッフの小西唯さん(34)。式場のセッティングや参列者の案内、料理や花などの発注、各種請求書の作成など、業務内容は多岐に渡る。「葬儀

は一人では行えません。思いやりのある同僚とのチームワークを進める中、私自身以前よりやさしい人間になった気がします」と笑う。遠方から駆け付け、ホール内で連泊する親族への対応もサービスフロントスタッフの仕事だ。「何気ない会話から得た情報を他のスタッフに伝えることで、より良いサービスへとつながられることも。深い悲しみの中でも安心感を得られるような対応を心がけています」と小西さんは話す。人口減少時代、葬儀需要の数的ピークは十数年後だと言われている。しかし、そのニーズは多様化しており、求められるサービスの質も高まっている。逝く人と、遺された人との大切な最期の時間をトータルでサポートする——葬仙が目指すホスピタリティは進化し続ける。